

第4回 魅力ある県立短期大学づくり検討委員会 議事録

1 日時

令和6年12月10日（火）午後4時から午後6時

2 場所

鹿児島県庁行政庁舎6階 大会議室

3 出席した委員

津曲座長，松田委員，高津委員，黒木委員，国松委員，福留委員，飯干特別委員

4 議事の概要

(1) 協議・説明

- ① 事務局から，資料に基づき，以下の事項を説明
提言書（素案）について

(2) 主な意見等

【総括】

○ 座長

- ・ この委員会において，学科再編や既存の3学科を見直す議論はそれほど出ていないので，提言書（素案）では触れていないところ。
- ・ むしろ，リベラルアーツを取り入れた方が良いのではないかという意見であったと認識している。
- ・ 文学科に関しては，コミュニケーションなどのネーミングを変えたら良いのではないかという意見があった。
- ・ 商経学科については，デジタルやマーケティングが必要ではないかといった議論があった。
- ・ 大きな立て付けとして第一部，第二部の学科はそのまま残すべきだという意見であったと思う。
- ・ 生活科学科生活科学専攻について，特に男性に人気・興味がある建築をアピールすべきでないかという意見はあったが，新しく何かしらの学科をつくるといった話はなかったところ。
- ・ そういったこともあって，学科の見直しは触れておらず，教育内容に触れている。
- ・ 定員について，全体を見ると定員は割れていないので，割れていない定員をさらに少なくすべきではないという意見であった。設置基準上，教員数にも影響が出てくる。そういったことを踏まえて，定員は現状の方が良いとい

う意見だったと認識している。

- ・ 現状、第二部商経学科は、定員割れしているが、全体としては96パーセントの定員充足率があり、第二部商経学科は88パーセントの定員充足率で9割を切っているが、全体を通してみれば維持できると考えており、中身を魅力的にすることで入学者を増やすことができるのではないかという意見であった。
- ・ 教育内容の充実については、「リベラルアーツ教育等の実践について」、「文学科における教育内容の見直し」、「男子入学者の増加を目指した取組」、「鹿児島への愛着を育む教育の充実」、「デジタル化やAIの時代に対応した教育の充実」、「リカレント教育の充実」を柱としたところ。

○ 黒木委員

- ・ 県立短期大学では、総合型選抜を実施していない状況があり、また、短期大学や専門学校の主戦場がこのような年内入試の選抜方法になっているのは高校側も十分承知しているので、総合型選抜対策のために探究の時間、課題研究の時間などのカリキュラムを充実させている高校があることを踏まえ、入学者選抜方法ごとの募集人員の配分について検討をいただきたい。
- ・ 項目としては、「定員等の見直し」に含めるか、「入学者選抜方法の在り方の検討」など新たなものとして立てるなどの対応ができたらと思う。

○ 座長

- ・ 年内で入学を決めてしまう時代になっている現状があるので、時代に合った入学選抜方法について検討いただくというのは必要だと思う。

○ 福留委員

- ・ 企業との連携について、「鹿児島への愛着を育む教育の充実」に関して、前回の検討委員会で観光学について議論した際に、企業との連携について検討するのも良いという話があったと思うが、フィールドワーク等という記載があるものの、企業との連携というワードが入っていないので、企業との連携というワードを入れた方が良いのではないか。
- ・ 大分県にあるAPU（立命館アジア太平洋大学）が、昨年サステナブル観光学部という学部を作っており、企業と連携協定を結び、インターンシップなどの人材交流等企業連携が盛んに行われている。
- ・ 県立短期大学においても、地域の勉強という意味でもフィールドワーク等に加えて、企業との連携も記載した方がよい。
- ・ また、APUでは学内に企業や行政のサテライトオフィスをつくっている。提言書（素案）では「リカレント教育の充実」の項目でサテライトに

触れているが、リカレント教育に限った話ではなく、学生に対してもサテライトにより企業や行政と交流するなど連携ができると思ったところなので、明記すると良いと思った。

- ・ また、高大連携、大大連携も入れても良いと思った。

○ 座長

- ・ 連携は一つのキーワードである。県立短期大学の魅力をつくるに当たって、四年制化も一つの手段であるかもしれないが、高大連携で3+2、大学連携で2+2、2+企業といった連携を能動的につくことも魅力ある県立短期大学づくりだと思う。
- ・ 連携は企業と県立短期大学だけでなく、高大連携、大大連携は必要なことである。すでに県立短期大学をターゲットとして、編入等の接続を増やしている状況もある。そして、入り口の部分を考えたときに高校との連携は重要な魅力のポイントになると考えている。
- ・ 今の企業はインターンシップと関連する就職が強く出てきているところ。鹿児島に人材を残すには、鹿児島の企業でどのようなことをするのかということを大学生のうちに感じていた方が良いという考えで、短期でなく、1か月のインターンシップなどの取組が傾向としてある。フィールドワークなのかインターンシップなのか区別が難しいところもあるが、連携は重要であると感じる。
- ・ 県立短期大学のOGから指摘がある管理栄養士については、大学連携の2+2であるとか、教員においても同様に2種から1種にするなどの連携はあると思うところ。

○ 松田委員

- ・ 入り口部分についての指摘があり、その後の教育内容充実のための連携の話が出てきていることを考えると、出口の話についても触れざるを得ないと思う。
- ・ 先ほど話に出ていた連携というものは、教育の質を高めつつ、企業や大学との連携を進めながら、県立短期大学に入学した後に就職まで見据えた自身のキャリアデザインができますというところを目指さないといけないと思う。
- ・ 例えば「鹿児島への愛着を育む教育の充実」のところで出口にも触れる、「企業や大学との連携を進めながら、鹿児島で学び、将来活躍できるような連携体制を構築する」といった表現を入れてみても良いと思った。
- ・ 四年制化について、現段階では現存するこの県立短期大学の資源をブラッシュアップすればもっと良いものができるということ、まだやれること

がいっぱいあるのではないかということの方針としてどこかで述べておく必要があるのではないか。

- ・ 四年制化は県民の大きな関心であると思うが、いろんな問題もあり、人口の動きを見据えた時に県内の他大学との関係がどうなるのか、入学者の奪い合いになって、大学の根幹である教育の観点がおろそかになってしまうことは避けなければならないので、今ある形で連携を強化することで多様な人材を受け入れ、多様な人材を輩出できるということを提言書に示していく必要があると考える。
- ・ 大学との連携について、鹿児島大学では編入学の定員を増加した背景に女子生徒の四年制大学進学率が全国最下位であったというものがある。
- ・ これまでは、新しいことをするときには、既存の組織をなくしてからということをやってきていたが、既存にあるものを使ってニーズに応えることはできるので、編入の窓口を広げれば四年制大学卒は確保できるのではないか。
- ・ 連携というキーワードは大きく取り上げていただきたい。

○ 座長

- ・ 県立短期大学で言えば、「私立が3校あるので、もう私立だけで良いのでは。」という話から「残しましょう。」という話があって、四年制化の話が出た。学科についても、「今のままで良いのではないか」という話から「絶対変えないといけない。」、「いや、中身を変えましょう。」といったようなマトリックスを作った時にいくつかの手法があると思うが、議論に出てきているのは、定員の充足率が高くて、卒業生の活躍、在校生の生き生き感とか。それらをみると短大の魅力はやっぱりありますよねと、委員会として県立短期大学を存続させましょうという話になっている。
- ・ 学科再編の話は出ていない、そのままで良いという話も出ていない、中身を変えましょうということで6項目くらい出てきていると。その中で経緯というものも入れて良いと思うし、私は「県立短期大学を取り巻く状況」の最後に、今の学生達の県立短期大学に対する思いがとてもポジティブだったので、そのような話をに入れて、産業界等からもそのようなポジティブな意見があったというのであれば、そのような評価があったということを事実として記載して良いと思った。
- ・ 大学人の考え方としては、入り口、真ん中、出口という順番であるが、その順番を少し変えたら良いのではないかという話はあるかもしれない。
- ・ 定員は入り口に近い議論なので、入り口の定員及び選抜というのがあり、次に教育内容の見直しがあり、最後に出口として鹿児島で活躍する人材というそういった並びもあり得る。

○ 国松委員

- ・ 提言書（案）の枠はこれでよいと思う。
- ・ 学生を雇う側からの視点で、現地視察した際に感じたこととして、県立短期大学の学生はかなり成熟している印象であった。
- ・ 高校卒業して1年ほどであれほど成熟しているとなると、急ピッチで成長せざるを得ない状況にあると思われる。
- ・ 4年間でリベラルアーツを成熟させる4年制大学と比べると、急ピッチで会社が求めるような主体性、判断力などを身につけていく、また、就職活動まで約1年しかないのでかなり酷だと感じたところ。
- ・ リベラルアーツを実践していく上で、単なる座学だと身に付かないと思うので、例えばゼミ方式やコミュニケーションを重視した方式を増やすなど、また企業連携という視点で、企業の寄附講座というものがあり、どういう会社がどういう人材を求めているか、それについて学生が質問するなど意見交換が多い方が学生の成熟の度合いやスピード感の向上につながると考えられる。
- ・ 企業との連携は重要なキーワードだと考えており、会社側も学生の急成長を望んでいる現実もあるので、学科やカリキュラムの変更も含めて学びの形の工夫は必要だと考える。

① 時代の要請に対応した教育内容の更なる充実について

ア 教育内容等の見直し

(ア) リベラルアーツ教育等の実践

○ 高津委員

- ・ アクティブ・ラーニングについて、科目を増やすというより、教育システム全体をアクティブ・ラーニング化するというのが今の大きな方向性である。
- ・ アクティブ・ラーニングのやり方は多様であり、いかに学生のモチベーションを上げることができるかである。
- ・ 通常の講義であっても、さまざまな方法で双方のコミュニケーションを取り入れるといったことが開発されてきているので、教員の考え方の転換というものも必要になってくると考える。
- ・ シラバスにこのタイプのアクティブ・ラーニングを行うといった明示化が重要。
- ・ 教員免許状について、放送大学では2種免許所持者を1種免許にすることもできるので、卒業後の選択肢の一つとしてあり得る。実際に放送大学を活用している鹿児島県の教員も多い。管理栄養士に

についても、同様にさまざまな方法があると思う。

- ・ 長期履修制度導入について、鹿児島大学に在籍していたときも、社会人で活用している人は多く、有効な制度であるので早急に作った方がよい。
- ・ 仕事の都合で週に何日かしか受講できない、育児・出産を理由に長期的でないと大学に通えないなどといったさまざまなニーズにも対応できる。

○ 座長

- ・ リベラルアーツ教育という一般教養的なイメージがあるが、それだけでなく、郷土の活性化という視点から郷土教育や望ましいものを作るための基礎的な素養といった概念だと思っている。

(イ) 文学科における教育内容の見直し

○ 福留委員

- ・ 「文学科における教育内容の見直し」の項目で「日本語教育もできる力」との記載があるが、これは日本語を使ってコミュニケーションができる力という意味だと捉えていたが、表記の在り方について整理が必要ではないか。

○ 座長

- ・ ここについては、インバウンドや海外からの研修生等が増えている背景があり、そういう人に対して日本語を教育することが重要であるが、日本語だけでなく外国語を理解した上で日本語教育すること及びその人材の育成が必要だという趣旨との整理である。

○ 飯干特別委員

- ・ 英語英文学専攻については、コミュニケーションという言葉を入れて名称変更しようとする動きはある。
- ・ アクティブ・ラーニングのシラバスの明示化について、学長に就任した際、シラバスへの明示化を助言したところ、当時紙媒体でシラバスを作成していて、ボリュームが多くなり、経費がかさむことを理由にうまくいかなかった。
- ・ ネットで閲覧できるようになったので、今後は対応できると思う。

(ウ) 男子入学者の増加を目指した取組

○ 高津委員

- ・ 今後少子化が続く中で、どの大学も定員割れという問題を抱えざるを得ないことを考えると県全体の進学率を上げるということは県内の高等教育機関が持つ問題を解決する一つの手段になり得るので、この検討委員会での議論とは別になると思うが、考えておいた方が良い議論である。
- ・ それらを踏まえて、「男子入学者の増加を目指した取組」の記載の仕方はもう少し考えてみても良いのではないか。

○ 福留委員

- ・ 項目で「男子入学者の増加を目指した取組」というよりも、「高校生全体の認知度向上を図る」の方が良いのでは。
- ・ 高校生全体に知られていないことに対して取組を行い、結果的に男子も増えていくという整理の方が良い。

○ 飯干特別委員

- ・ 高校生への認知度を高めることにつながると思うので、名称変更が可能であれば、対応をお願いしたい。

○ 座長

- ・ 他県の私立芸術系大学のことだが、定員確保が難しい状況が続く中、定員割れしないのがデザイン系。芸術系で一番倍率が高いのが、デザイン系であったりする。
- ・ 世の中が求めているものがデザイン力であったりする。ポップアート、意匠など分かりやすさが影響しているとも考えられる。ここでいうデザインは、大きなコーディネート力やソリューション力など短絡的に使用されるものとは異なる意味合いのものであり、良い言葉だと思う。
- ・ 確かにここだけ読み取った時に、男子も含めて建築に興味を持った人の入り口として、入りにくさはあるかもしれない。今はSNSで検索する時代であるので、1ページ目をめくってもらえないことにはつながらないので、最初の段階で分かりやすい言葉を使うというのはあり得ると思う。ここにデザインという言葉が入れられるかどうかはまた検討したい。

○ 黒木委員

- ・ 高校生へのアンケート結果等に関して、学校名が県立短期大学でなかったとしても、対象者が高校2年生であることやキャリア教育の在り方等を踏まえると、教員の認知ができていない、薦めていないといった同じような結果になった可能性は考えられるところ。
- ・ 見出しに関しては、男子入学者に関わらず、高校全体に対しての認知度を高める取組・周知する方法等でまとめた方が、新聞で大きく取り上げられている中で高校側にもしっかり受け止められるようなメッセージという意味合いでも良いと感じる。

○ 座長

- ・ 入り口、真ん中、出口を考えると、県立短期大学をもっと知ってほしいという情報をもう少し記載しても良いと思う。
- ・ 従来のやり方であると、県立短期大学のアピールというものが、高校生には十分に届いていないということが一つの現状であるとするならば、そこに届くための取組が入り口として必要なところであると思う。
- ・ アンケート結果を踏まえると、高校生から見るとまだ県立短期大学は分かりにくいよね、ということだったのだと思われる。
- ・ 提言の中でよりの確な情報提供、広報活動といったような記載はあっても良いと感じた。

(エ) 鹿児島への愛着を育む教育の充実

○ 座長

- ・ 先ほど福留委員から、観光学部の話があり、観光学部をつくるという議論については別にして、観光等の人材育成について、県立短期大学に果たすべき役割があるのではないかという意見があった。
- ・ 全体の流れからすれば、観光学科を創設するというよりは、まずは、「リベラルアーツを発掘したほうがいいのではないか」や「フィールドワーク等で鹿児島の愛着を育む教育を重視しましょう」等の意見であったので、提言（素案）に入れたところであるが、本日、福留委員からは、「観光は重要であるので、観光についてもっと記載があっても良いのではないか」という意見があった。

○ 国松委員

- ・ 先ほど「デザイン」の話もあったが、「これを学んだら、どんな仕事ができるのか」というイメージが湧かないと学生も選びにくい

と感じている。

- ・ 鹿児島のことを知るとともに、その先どういう仕事があるか、どういうOBがいるか等のイメージがセットにならないとなかなか学生も選びにくいのではないかな。
- ・ 生活科学科の名称もそうだが、「これを学んで、将来どういう仕事に就けるのか」、「鹿児島でどういう仕事ができるのか」というところが、もう少し情報発信としてあった方が良いでしょう。
- ・ 広報活動も方法の1つだと思し、「鹿児島への愛着を育む教育」は実践した方が良いでしょう。また、県立短期大学を出て、「こういうことを学んで、こういうことをしている人がいる」ということを併せて周知できると良いと思う。

○ 座長

- ・ 大学には基本的にカリキュラムマップがあり、「どのようなことを修得するのか」を示すものがあるが、より具体的なものであれば、「このような思いを持っている人は、この大学でこういうことを学んで、こういうところに行きますよ。」という、キャリアデザインマップみたいなものが、よりはわかりやすく出てくると、短期大学は出口として多いのは就職なので、大学と比較すると、どのような研究をしているかを示すよりも、キャリアデザインマップのようなものの方が良い。
- ・ 「鹿児島でこのようなことを学んで」、「鹿児島でこんなことができます」というのが分かるようにすることが広報としては大事だと思う。
- ・ 鹿児島への愛着を育む教育を受けたことによって、どんな世界が新たに広がるか、キャリアデザインマップでなくても、示していく必要がある。
- ・ この項目についても、地域との連携、企業との連携っていうのが必要になってくるということ。「鹿児島の愛着を育む教育の充実について」で連携について記載するか、もう1つ別に「連携」について項目を立てて記載する必要があると思う。

(オ) デジタル化やAIの時代に対応した教育の充実

○ 高津委員

- ・ 方向性について、15コマで2単位や1単位で授業設定しても、学生の受講生は増えないのではないかな。
- ・ また、時代はどんどん変わっていくので、それを追いかけて科目を立てても少人数の学生にしか伝わらなかったりするなどうまういかな可能性もあるのではないかな。

- ・ 時代に即応した新しい考え方を広く学生に周知するには、科目を立てるのも1つの方法として重要だと思うが、講演会を開くなど学生全体に対して実施する方が有効である場合があるのではないか。

○ 座長

- ・ データサイエンスという教養科目を取り入れる方法もあるが、その前にオリエンテーションや様々な授業以外の場面でデジタル化を大学全体として進めていって、学生がそこで学べるようにする方法を進めるということか。

○ 高津委員

- ・ 科目として設定するだけだと、少数の学生に対する教育になりがちである。デジタル化やAIの時代に対応した教育は入学する学生全員にして欲しい教育なので、科目として設定するのは方向として違うのではないかと思う。

○ 座長

- ・ 例えば授業では「Teams」とかを導入しているのか、それとも、学生自身で登録しているのか。

○ 飯干特別委員

- ・ 教養教育で情報教育を必修で行っているが、来年度から、数理・データサイエンス・AIを授業の中で取り扱う予定。
- ・ また、「ロイロノート・スクール」という初等・中等教育で導入されている教育支援システムについて、教職を受ける学生は利用できるように準備を進めている。
- ・ また、他大学では学生も「ロイロノート・スクール」を使っているところもあるようなので、県立短期大学全体で、「ロイロノート・スクール」を活用できないか検討を始めている。

○ 座長

- ・ オリエンテーション等で一番始めに3日間かけて全員に教えたりする大学は結構増えてきている。
- ・ 横軸で学生全体のベースを上げていくこと、縦軸でデータサイエンスと等の発展的なことをしていく、2つが必要だと思う。
- ・ なので、横軸もあつた方が良いという指摘だと思う。

○ 松田委員

- ・ 高津委員の意見は重要なことだと思う。新しい時代のニーズに対

応することは必要なことであるが、その度に科目を増やすと、教員も増やす必要がある。これを繰り返すと、いくらお金があっても足りないという状況になりかねない。おそらく、「鹿児島への愛着を育む教育の充実」と「デジタル化やA Iの時代に対応した教育の充実」の根は共通で、連携で乗り越えることが、重要になってくるのではないか。

- 例えば、データサイエンスも、D X関係を専門としている先生方は全国の大学で引っ張りだこであり、人材難という状態にあり、最先端の企業との連携や場合によっては県内大学との連携により、共通の情報リテラシー教育を進めることが1つの手段として考えられる。
- 科目を増やすよりは、あるものをどのように活用するか、今までなかった連携を作ること、課題を乗り越えることができると思うので、そのような方式で進めていくのが大事だと思う。

○ 座長

- 2つ目の内容が、学生全体にD Xの素養を身につけさせるために、始めにオリエンテーション等でリテラシーについて教育するということを書いているのだと思う。
- 企業としても、大学生時代に高い素養を持つことを求めない。詳しいことは企業で実施する。大事なのは嫌がらない、慣れているぐらいを求めたい。一番嫌なのは、県外に流出することであり、「若いうちに就職して欲しい、企業で教育するから」と述べるくらいである。
- そのような意見もあるが、デジタル関係の素養がベースにある人とならない人では大分違う。

(カ) リカレント教育の充実

○ 座長

- この項目について、先ほどリカレントも重要であるが、大学や企業との連携がより重要ではないかという意見があった。
- 様々な形で企業と連携をして、ボランティアや生涯学習のようなものもあると思うが、お金を支払っても受講したい授業ができないかと思っている。
- また、大学生でも学び直しができるものが、県立短期大学にあればありがたいし、重要だと思う。
- しかし、D Xの教員を採用するとなると、全然見つからない。一方で、企業は非常に人材が不足しているため、いくらでもお手伝いしますというのが、企業のスタンスではある。ここは企業との連携

というものをベースにすることが必要だとは思う。

- ・ リカレント教育がうまくいっている大学はまだないといってもいいくらい難しい。
- ・ 日本全体として、リカレント教育は世界からみてもマーケットが開いていない。30代、40代の学生が少なく、日本全体の課題でもあるが、これからの大学が知の拠点であるためには、社会人の学び直しであるリカレント教育はとても重要なところだと思う。教員にとっても、社会が求めているものを社会人に教えることを通して、初めてわかるみたいなのところもある。リカレント教育は教員の質を上げるためにも重要だと思っている。

○ 福留委員

- ・ 修正ではないが、言葉の定義として、「リカレント教育」と「リスクリング教育」が併記されているが、「リカレント教育」は、学び直しであり、語学を学ぶ、パソコンの操作を学ぶことである。リスクリング教育は、職業訓練のように、働くための新しいスキルである。なので、大学はアカデミックな話であるリカレント教育は提供できる。一方で、リスクリング教育ができるかどうか。線引きが重なっている部分も多く、できなくないかもしれないが、定義を曖昧なまままで使うのは引っかかる部分である。
- ・ リカレント教育はもちろん大学でやらないといけないと思うが、リスクリング教育は先ほどの繰り返しになるが、例えば、運転免許の大型を取るとかであるが、それを大学が提供するかっていうと大学じゃなくて、他の民間でも提供している。なので、少し整理したほうが良いと思う。

○ 座長

- ・ リスクリング教育は、もう一度資格を取るためという場合に使用することが多いと思う。
- ・ 大学が行っているリスクリング教育がないわけではない。例えば、幼稚園、小学校の教員免許持っている人も認定こども園では、保育士の免許も必要になる。そのときに、保育士の資格を与えるのは、保育の課程を設置している大学ができることである。あるいは、医療の分野でも、福祉のある資格を持ちたいというときに、大学でその資格取得の単位を持っているところがあれば、例えば介護士持っているときに福祉の別の資格を取るというときに、大学で単位を取得するというようなことができると思うし、これからは看護師の免許持っていて、保健師の免許も取得したいということもあるかもしれない。そのような、リスクリング教育は大学の役割としてあると

思う。しかし、定義としては、基本的にはリスキリング教育は資格や技能を習得するもので、リカレント教育は学び直しで、もう一度、経済学を学ぶという際に使用するもので、言葉として違うものになる。

○ 福留委員

- ・ 提言の注釈に「リスキリング教育」も入れて、定義を明確に示した方が理解しやすい。

イ 定員等の見直し

○ 座長

- ・ 今の県立短期大学は、ほぼ充足率 100%で来ているのでどこかの定員を別の学科に持ってくる必要はないと思う。定員を下げることは、入学者が減るため、収入が減ることになる。そうなれば、教員を辞めさせないと維持できなくなる。まだ高い充足率を持っていて、夜間課程が他と比べれば低いですが、逆に言えば、昼間課程が高い充足率があるから、夜間課程を維持できている。
- ・ 夜間課程があることは、鹿児島県にとって非常に重要なことなので、維持しないといけないということを考えると、定員を下げたら魅力もなくなるので、現行の定員を維持すべきである。

② 地域社会への一層の貢献について

○ 黒木委員

- ・ テーマが「地域社会への一層の貢献について」であれば、認知度が足りないので、ミニ講座や出張講座等の開催をさらに充実させるという並びになると思ったところ。
- ・ ミニ講座、出張講座は高校側としては恩恵を受けているところ。
- ・ さらに、学校の説明など具体的な内容を直接学校に来ていただくような、身近に県立短期大学のことを知ることが出来る取組を充実させていただければ良いと思う。
- ・ 文面的には、逆という印象を受けた。

○ 座長

- ・ 入学等の入口の部分と地域貢献と一緒に記載されているところはある。
- ・ 「男子入学者の増加を目指した取組」の項目を変更して、高校生全体に魅力ある短期大学を目指した取組というところに移動できる内容が「地域社会への一層の貢献について」にあるかもしれない。
- ・ 「地域社会への一層の貢献について」は、地域住民と一緒に課題解決について考えていくということで、ストレートな地域貢献になると思う。

- ・ 「リカレント教育の充実について」の項目では、「再掲」として記載しているので、そのような記載の仕方もあると思う。
- ・ 「男子入学者の増加を目指した取組」のところを膨らませて、入口のところで、魅力ある県立短期大学について広報するということで、オープンキャンパスやミニ講座を記載してもいいと思う。

○ 福留委員

- ・ 地域との連携や企業、他大学との連携の機会を増やすというのが出てきている。あとは、「リカレント教育の充実」の再掲になる。なので、タイトル自体が、「地域社会への一層の貢献」よりも先程から議論している「連携」が柱として立っていいと思う。
- ・ 地域、それから企業、他大学と連携しながら、地域社会に貢献していくという構成になる。
- ・ 連携はあくまでも手段であり、貢献することが目的である。柱の立て方として、連携を強化するっていうところが、他の項目との整合も考えて、柱として立てても良いと思う。

○ 座長

- ・ 高大連携や大大連携、企業との連携を通じて、地域に貢献する人材育成するという方がわかりやすいということか。
- ・ 当然、時代の要請に対応した教育内容等のさらなる充実というのは、地域社会への一層の貢献にもつながるが、むしろ、(2)では、地域に貢献する人材育成を県立短期大学の最も重要なミッションとして、それを高大連携等の様々な連携によってしていくという立て付けの方がいいということではないか。

③ 独立行政法人化について

記載の内容で合意が図られた。

【鹿児島県の転出入について】

○ 福留委員

- ・ 一部報道機関が魅力ある県立短期大学づくり検討委員会について報道していただいております、11月にもアンケートについて詳しく記載していただくなど、県民に関心を持って頂くという意味でありがたく思っているところ。
- ・ 12月8日の社説で県立短期大学について大きく取り上げて頂いたところであるが、少し違和感があったので、ファクトについて総務省出典の住民基本台帳人口移動報告に基づいて説明させていただきたい。
- ・ 社説で言いたかったことは、おそらく前提として、短期大学のままで良いのか、四年制大学でなくて良いのか、そこに触れずに議論を進めていくこと

に問題提起を投げかけたものだと思っている。

- ・ 全国的に少子化が進む中で、短期大学が少なくなり、四年制大学の進学率が高くなっている状況にあるが、鹿児島においてはそのような流れになっていないという内容である。
- ・ 最後の記載に鹿児島県の転出超過が2023年の1年間で2,752人であり、そのうち4分の3は女性が占めている、女性の4年制大学進学率は全国平均を大きく下回るというデータもある、こうした数字と長く同じ体制を貫く県立短大の在り方は関係ないのか、県の将来設計を念頭に検討が必要ではないか、とある。
- ・ この記載に異論はないが、県立短期大学があることで県外に女性がどんどん出て行っている、しかも県立短期大学があることで四年制大学の進学率が低いのではないかと、つまり県立短期大学があることが弊害かのように受け止められかねない。
- ・ 住民基本台帳移動報告をみると、転出超過は2,752人であり、そのうち、男性は646人、女性は2,106人である。
- ・ 年代別に見ると、15～19歳では、大半が大学に進学する年齢に当たると思うが、女性が1,045人であり、男性が1,351人であり、男性の転出超過が多い。一方、20～24歳では、就職期に当たると思うが、女性は957人、男性が579人であり、女性の転出超過が多い。
- ・ 全体で男性よりも女性の転出超過が多い理由として、60歳以上で男性は転入が増えているが、女性の転入は少ない。可能性として、男性は仕事を辞めた後、地元に戻ってくることが考えられる。全年代においても男性の転入が多く、女性は少ない。
- ・ このような事実を踏まえると、社説に記載の、県立短期大学がある弊害がこういった問題を引き起こしているのではないかと読めてしまうのは違和感があった。
- ・ 県立短期大学を無くして四年制の公立大学を作ったとしても、県外に進学している15～19歳の男子生徒の中には新設の四年制の公立大学を目指す人も出てくると思う。そうすると今、県立短期大学に通っている女子学生の一部は弾かれるという影響も出てきかねないのではないかと、弾かれてしまった女子学生はどこに行くのか、就職するのか県外に行くのか、となり得る。
- ・ また、20～24歳の女子学生が就職で県外に出て行くというのが最も大きな問題で、県内の企業が受け止め切れていないところもある。
- ・ この問題に対しては、女性の人口流出を今より緩和させる、あるいは女子の四年制大学進学率を上げるには、県立短期大学を四年制大学にするのは、一つの選択肢かもしれないが、加えて就職の問題であったり、全年代を見るときにどうなのかといったところであったり、この議論は他の場合も含めていろんな要素を考えながらやらないといけないことだと思った。

- ・ 県立短期大学については、アンケートにもあるようにまだまだ出ていない部分があり、逆に言えば、できることがまだまだたくさんあると思っている。
- ・ 現地視察において対応した学生は短大から四年制大学に編入する人も多い印象であった。そういったことも踏まえて、県立短期大学のポテンシャルを考え直す意味で、幅広い議論になれば良いと思った。

○ 座長

- ・ この検討委員会は、魅力ある県立短期大学をどうつくるかという議論でスタートしたところであって、県議会では四年制大学の話も出ているところではあるが、今後どのような意見が出たとしても、今の県立短期大学を魅力あるものにするための議論は無駄ではないので、議論を詰めていくことは必要だと感じている。
- ・ 望ましい短期大学を検討する委員会であるが、その背景には、短期大学をどのようにイノベーションしていくかということが一つ。
- ・ もう一つが、鹿児島の若年者をいかにして地域に残すかという視点があったと思う。
- ・ 人口動態について、昔は18～28歳の男女比はほとんど変わらないが、男子が極端に少なくなって、女子が多く、10年くらいで均衡し、その後逆転するというイメージであった。改めてここ20年の人口動態を見るとその傾向は出てくると思われる。今は女性の人口流出が早くなっている印象であるが、全体で見る必要はあると思う。
- ・ 鹿児島の男性は帰巢本能が強いから、27～28歳くらいから鹿児島に帰ってくる印象がある。年を召された女性は、家族が引き取ることで、県外で出て行くことも多い印象。
- ・ 全体を見ると男性より女性の方が少ないことになると思うが、年代別に見ると違った視点で生活パターンや傾向が出てくると思うので、この検討委員会とは別にこの人口に関する議論を深めても良いのかもしれないと思った。

【その他意見について】

○ 国松委員

- ・ 共通する課題として、情報発信や広報であると感じている。高校生に対する情報発信や企業に対する情報発信が連携の活動につながってくると思う。県立短期大学の魅力や意見交換したときのポジティブな学生たちの意見など、本当はこんなに良いところあるということが伝わって欲しいという期待も含めて、提言書の中に情報発信や広報活動の強化が入ればと思う。

○ 飯干特別委員

- ・ 県立短期大学の近況を報告する。

- ・ 1つは、大大連携の話があったが、鹿児島大学には、今年、法文学部の定員 20 名のうち今までで最高の 15 名が合格した。他の学部でも、農学部が定員 5 名のうち 3 名、教育学部で定員 5 名のうち 2 名が合格した。鹿児島大学に合計 20 名が合格したので、今後も実績を伸ばしていきたい。
- ・ 現在、鹿児島県立短期大学では 30 名程編入しているが、他短期大学ではその倍くらい編入しているところもあるので、どのような編入対策を講じているのか、公立短期大学協会の研修会で意見を聞きたいと思っている。
- ・ もう 1 つは、県内にある業界トップクラスの企業の人事担当の方が、県立短期大学に訪問していただいたこと。
- ・ 今回の検討委員会でヒアリング調査があり、県立短期大学であれば、英語のできる人材を採用できるのではないかとということで、挨拶にきていただいた。
- ・ 業界トップクラスの企業に訪問していただき、PR 活動は重要であると感じたので、これからも PR 活動に力を入れていきたい。
- ・ 最後に、入試の話が先ほどあったが、昨年県立短期大学では、学校推薦型選抜で全国枠を導入している。全国枠では、鹿児島県内の高校の生徒も対象となる。昨年は生活科学科と文学科で導入したが、今年からは、商経学科も実施するため、第一部の全学科で全国枠を導入することになる。
- ・ 総合型選抜の話も先ほどあったが、公立の短期大学では総合型選抜を実施しているところもあり、東北大学も総合型選抜に力を入れているなど、様々な事例もあるので、参考にしながら検討していきたいと思う。